常山紀談

十七

和書門
類 四二三〇一
函 一二九
架 二
冊 一七

内閣文庫
和書
類 四二三〇一
號 一七
冊 一
函 七〇
架 八

内閣文庫
番號 和 42301
冊數 17 (4)
函號 170 49

国立公文書館
National Archives of Japan

宮内省圖書寮

常山紀談巻之十七目次

一　真田昌幸父子三人始末の事
一　西村孫之進武功の事
一　仙洞兵衛伊豫國松前城を守る事
一　大久保忠佐ゟ三枚橋城を賜ひし事

浅草文庫

常山紀談巻之十七

備前國　湯浅新兵衛元複輯録

○真田安房守昌幸ハ海野小太郎幸氏二十一代の末なり父海野弾正幸隆信州真田に居く真田氏と称して武田家の臣なり嫡子源太左衛門信綱ハ長篠にて討死して二男武藤喜兵衛昌幸と云長篠の後高坂弾正五ケ條の諫をすゝる其一条ゆく昌幸に兄れ家をつゞせらるゝ父代幸隆後一徳斎と号ス昌幸信玄の近習ゆく十八の歳川中嶋にゆく鎗を合せ天正十年勝頼諏訪より陣し四方より敵来り対昌幸五口妻の城にこもれよといひくるまゝに長坂長閑其謀を用ひて勝頼郡内に赴きて死して國亡ひぬ北条氏政兵を出して甲府を攻取んとするとき

昌幸徳川家ニ属シ依田信蕃と碓日嶺ニ陣して北条の粮道
を塞く　東照宮北条と和平しまひ上野の沼田を以て甲斐
の都留信州佐久二郡ニ換らるべしと約あり是より前昌幸沼
田城を攻取て要害の地とせり真田ニ上田を與へ沼田をば
氏政ニ渡さべきよし仰出さる上田ハ小さき信玄以来真田ら居
所なり昌幸ことに徳川家ニ功有といへども僅小上田と沼田を賜ハ
ぬ賞甚薄しと思ひく辞しやそるハ沼田ハ賜りし地ニ非ず
吾鋒ふく取得さきバ故なくく人ニあゝん事叶ひがたし
ゆゑ豊臣家ニ属さべきよしを云送ぶ其折うゝ秀吉
東照宮の上京なき事を怒く此を悦ひ密ニ上杉景勝ニ真田
ニ力を合せよと下知せられしバ千六百の兵を真田ゞ許ニ援
ふに　東照宮真田ハ奸謀ある者なりとゆゑより憎せられる
上無禮の答を怒らせのひ大久保七郎右衛つ忠世鳥居彦右衛つ
元忠平岩七之ゆ親吉柴田七九郎康忠を将ゝく七千の兵を以
て上田を攻させる昌幸城より一里計隔る加賀川を敵渡る
時半途を去べしとものひくるゆ甲州の浪人板垣修理さくひ敵
の半渡を討く利有しに三遠の物師ども多れバ敵の後陣二のゝ
此勝ゆゝんと云くれバ昌幸尤ありとく城ニ近き砥石ハ城ニ嫡
子信之矢津の砦ニ矢津但馬をこめ金寄手必楽屋平より寄べ
しよしとふ受さく不意ニ突さ出んとの謀なり又城外小船
山のうげ小郷民を伏置くり寄手さゝみく町口ニ押入惣郭の内
横小路ニ柵をくひ違ひよゆひく簾をうけ其蔭ニ伏兵を金

鉄炮を打かけ昌幸ゟ引受城門三方より一同ニ打く
出るゝ者ハ寄手支へ兼く崩れ多く砥石矢津より
も切くかゝり郷民もとゝ合ゝ者ハ大久保十四五騎ゆて踏止り
戦ひ〳〵加賀川まで引取ゝ鳥居ハ高きゝを退きゝを砥石
の兵喰留んとゝく慕ひ来ゝ者ハ五六町計の間ゟ討ゝ者数多あり
大久保ハ鳥居ゟ敗軍を見ゝく忠世唯一騎引返て弟平ゟ忠孝後彦
門豊ゟ物具ゟ銀の揚羽ハ蝶のさゝ抱て乗付く馬より飛
下ゟ鎗を提ゝく扣ゝ者ゟ小敵押勢る中ゟも真先なる兵を突
伏ゝ忠世ゟ忠世ゟを見ゝく松平七郎右衛門を引返ゝ
来ゝ平ゟハ小ゝ者ゟ者ゟふゝ者ゟ者ゟ者ハ真田も進ゝ得ハ
其間僅十間計ゟ隔ゟれども忠世少もひるまハ日置五右衛門忠

世ゟ陣の前を通らんとゝ平ゟそゝゝて敵ゟ三ツ巴を付さるそ
〳〵云ゝゝゟ日置いゝあやまり名味方ゝと心得く日置五右衛門
なゝ〳〵名乗ゝく通るゝゝと足立善一郎政定鎗ゝ右ゝ鞍の前輪
を突五右衛門が後者鎗を取直ゝ善一郎を突平ゟ前をゝゝ
通らんとゝすゝハ平ゟゝつきゝれども従者鎗を拵へく平ゟ小
向ふ其間ゟ五右衛門乗抜ゝ処を氣多甚六郎のゝゝゝて追さ
まゝ股のゝゝを突其時五右衛門ふゝ顧り川中島の加勢と
見ひく危ふゝ〳〵いひくかけ抜ゝ忠世平岩ゟ陣ゟ往て
敵ハまゝゝゟ追懸来ゝ我跡を詰らるゝゝば切くかゝれへし
とゝゝも親吉敵小勢なゝゝも必定近所ゟ伏兵有へしとて進
ゝゝ其間ゟ昌幸城ゟ引入ゝ此日酒井與九郎殿ゝて敵ハ

首を取るべき其日の一ハ功名なり翌日忠世康忠真田が枝城丸子を攻んと筑摩川を渡るを真田見て海野町へ引出ハ重原を一騎打小相働く忠世鳥居平岩を後を結ば敵の中を取切崩べしと云へ同心せば真田引取ん味方ハ八重原に陣真田も城を出て陣に足軽軍あり芝土居をつき柵を結苅田働き小田を送るかゝ濱松より井伊直政大須賀康高を始ゝ五千餘援兵ありさまでも秀吉の下知ゆへ景勝大軍ゆへ上田の後巻するこの由諸将相謀りて陣拂ひ昌幸が次男左衛門佐信仍はけ墓りんと大返しふかへしに軍もべき物色を昌幸ハ信仍を制して追ざりそ諸将帰陣の後昌幸大息ついて　徳川殿ハ誠の英雄なり加勢を以て城を攻

信仍或本ニ訓ズ何レカ是ナルヲ知ズ

る色をあらはしたるを昌幸其謀に隠り防ぐふのゝ心ありて夜討軍ばけの志夢も無ありて斯ぞりて不意に取る事吾計の及ぶべきにあらずと云そり其後　東照宮太閤と和平なりしは景勝の加勢ハ頼もなく信州甲州の人々を真田頼まして秀吉よりて徳川家に帰属べき旨をヤせは御許容あり天正十五年正月七日昌幸信州深志ハ小笠原右近大夫貞慶と共に駿府に参りて　東照宮に謁奉る

東照宮も昌幸ぞ武勇侮ぞ思召て嫡子信之を本多忠勝ぞ婿ふせんと仰らるゝ小昌幸夫ハ内あやまちなん本多ぞ女を信之ぞ妻にせん度さふ屋ふいぞ

東照宮此事を太閤ゟ御物語有〻小忠勝が女を養うて今
ハこゝ女なりこいそせ〻まてよこゝろ〻れ〻ば　東照宮使
を以くまろ〻〻と仰送らまゝ〻ば果して昌幸ゟ受ゝと云り
斯く北条征伐の事起まろ天正十六年八月北條氏政の使と〻
て小條氏規聚樂ゟ系氏政上京せべ〻といへ〻ゝ上野の沼田を
天正十年徳川殿と和平の時相渡さるべきを真田恋ゝ事を
申て小條家志を失ひ平く安房守ゟ彼地を小條ゟ渡さべき
旨をもめさるとゝ氏政上京せんとそゝ〻ゝる秀吉ゟ使往年
の事審小知ざる事なり北條家ゟ土地の事能知る者を上京
せ〻めよと〻く氏規ゟ暇ゝろ〻ぬ翌年坂部岡越中融成入道
江雪大坂ゟ赴きゝるべ〻ば秀吉事のよ〻を守ゝひ真田ゞ上州

の内北所領三分二并沼田の城を北條ゟ渡〻其換地ゟハ徳川家
より真田ゟ與へらゝべ〻因所三分一名胡桃城とも真田已前の如
く領せべきよ〻江雪小命せ〻れゝゝかゝく真田ゞ方より沼
田を武州鉢形の北條氏邦ゟ渡〻氏邦其従士猪俣能登範直
を沼田の城代〻せ〻ふみゝゝ人ゝく得失の辨なく名胡桃の城
ゟ真因ゞ領せ〻事を怒り者ゝ〻城を奪ひ取さゝ昌幸
太閤小訟へ〻〻ば太閤小條ハ沼田を得バ上京せべきと約〻
ゝゞ〻遅緩を怒らゝ〻上ふ此事をゝく氏政を征伐せんと
志決〻〻く天正十八年秀吉師を出〻〻く小田原ゟ打向ハる東山
道の先陣前田利家碓日嶺ゟ上杉景勝ハ坂本ゟ〻ゝば
名胡桃を奪ひ取〻〻猪俣ハ戦ハ〻〻て城を捨逃落ゝゝべ〻ば真

田信之後伊豆守城に入る事を得るに昌幸ハ去る天正十三年以来秀吉の恩顧を得るに大谷吉隆をもつて次男信仍を秀吉の許に人質に出すより其後石田兵を起さるの時真田父子三人ハ奥州に打向ふ途中に石田ゞ使来たりて秀頼公に為に旗をあげん同心せんれバ信州に故主君の地甲斐を添て参せん偽なりとも一ふしたくく起請文を送りたり昌幸素より徳川家に二心あるまじバさるに引返さるべきいよ信之是ハ然るべきに内府智勇勝まさる人なりいかでうきもやとく討滅さるべきもしも昌幸聞入ざ

又一説に本多に親しく厚くたへバ石田よりみ〳〵紀由を信之へせるバ弟の信仍女房ゟ内〻みよりまた父に引

やうやうに又信之西國に與せんとの必軍敗まるゝ其時父と弟との危難に逼らんを助けく家の亡ぶる拵にせんといひたまバ信仍西國の軍敗まるゝば父も又信仍も同じく戦場の土となるんに何とかく助けさせるべき徳川家先年兵を出して上田を攻る時景勝加勢ひ〳〵其報礼なるべきあるべき其比秀吉公和平を取行ひ武名を世にあげるに豊臣家の恩浅からざるに唯疾石田に同んぬる然るべ〳〵凡家ゟ亡ぶべき時人の死べき時至るバ潔く身を失ひて勇士の本意あるべし何条きたなくいのち生く家の亡びざるやふせんと云やはく争ひたまバ信之怒く汝が剛不禮なりとて既に

切く捨べくんてしらバ信仍いやゝ只今爰ゆゝ首を刎ら
まゝ事ハ許さまゝよ信仍ハ豊臣家の為ゝ身を失ひさん
志なりといへバ昌幸ゆてく兄弟の爭各其理有り太閤世を
させゝまゝ後此事の起まゝるも必秀頼公の為ゝすゝ忠ゝ
ゆゝ信之ハおりゝるゝ信仍がいやゝ吾思ふ所ゝれバ
ゝまゝてゝゝゝ引返ゝ信之ハ是より心任せるせゝとて別
まゝゝといへり又一説昌幸云ゝる八會津より宇都宮ゝて
七日路なまゝでも日の圖此程より三日の行程なり景勝と
謀ゝを合せ前後より攻ゝゝんゝ伊豆守俄ゝ裏切するな
らバ徳川殿を手ゝやゝく討取べゝといひゝまゝでも信之内府
ハ勇略百萬の人ゆもちゝゝり味方利有ん事有も是ゆ

ゝて遂ゝ兵をゝゝゝく参りゝまゝバ東照宮信之を召
て安房守が片手を折ゝる心地すゝ軍ゝ徒ゝゝゝバ必信州
を賜るべき後の證ゝて御刀此繻のゝゝを断く賜ハり
ゝるといへり又真田兄弟の爭此處ハ佐野此天妙といゆ又
犬伏といゆ所ありゝもいへり
昌幸ハ引返ゝく沼田の城ゆく信之が妻ゝ對面せんと云ゝる
ゝ信之のゆ此方ゆもいへゝ既ゝ父子仇となりゝく引分まゝるひ
らバ父ゆく粧ゝゝゝゝ城ゝ入奉ゝく事ゝゝゝゝ
ゆゝゝく本丸の門を固めさせ自ら物具取出ゝ女房共皆刀を
側ゝ至ゝり厩ゝ行ゝ毛の馬ゆゝ厨の土間ゝ居るゆゝゝ
下知せゝゝゝる昌幸ゆて吾過ちなり人ゝ能ゆゝん日本一と世

は云る本多中務が女なりしるよ引取の妻ハかくして有るべし
此婦人あるんよハ真田が家危うくしといひしるとぞ昌幸夫よ
り須河よ至り高間越よかくりく上田ふかへりしるとゝ
木曽より登らせのよ時御使を以て禍をもくゆてこそ
あまこ降参せよと仰せ有しふ昌幸ゆて秀頼の為よ城をもりん
攻らまこバ一矢仕んと答へしるバ又御使ふく石田小西名已が
威権を恐よせんが為よかゝる企よ及べと豊臣家の恩を蒙臣
人々皆背きくるを以て知べし扨降参るくバ信之ふ腹切せ、
其後城を攻破るべしと仰送らせれしふ昌幸聞て太閤恩深
き人々の背きんハ此人々心の同ぶざる故なり既よ子ゆて
ハ信之父と相違ひくるふくを召るべし信之ふ腹切せ

まんとゝや親の子を愛せるハ誰も同ど事よれへども信之父と
とのふ城ゆあるバ同ど枕よ討死せべし信之を助くべきふあらば
こ答ヤせるバさるバ攻よくく陣を寄らる其日ハ百姓の家ふ
込入さるふ榊原康政真田今夜必夜討さべしとて物見を
出しふ篝火を透間なくさるる果して信仍夜討せんと
支度しるるまでも康政の設ふよりく夜討ハせぬ人々斯
く明まバ九月六日押寄のよ浅見藤兵衛只一人隍際ふ進み
るゆふ打懸る鉄炮ふ朱ふ十二引の差物ふさるまこ其身もひし
と折敷伏くく味方の續くを待小栗治右衛門大音あげ浅
見功名せるとゝく深入しふなせるゝゆふるをゆ浅見立上
て汝ふ先をさせんやといくく門ふ付ふ門を開きて討て出

浅見小栗得〻と鎗を合すると左右の山〻屏より打出
を鉄炮雨の降ごめ〻浅見が従者虎若といふと〻ハ剛の者よ
く刀を抽き鎗の穂先をくぐと入く敵の足を薙拂ふ浅見と
痛手を負倒まと〻を虎若足を取く引提げ持帰ると〻ふ
浅見小栗を助けよと云虎若ゆて主人の先途の為ふこて来
ると〻ま他人を何ようせんと云くかい負〻こ〻退く浅見差物を
たゝき落されと〻と覚ゆ取て来らばバ生甲斐なゝとゆ虎
若北る〻く差物を落さば恥なり鎗を合せく落〻さるハ
恥よ恥〻とひく念なく帰ると〻り城兵山本清右衛門依田
兵部堤の上よ上るを〻く寄る三十騎計馬を並べくもめい
て駈よせひし〻と馬より〻〻進み行敵藤左衛門山本依田

前ふつと出名乗るを〻と均〻く御子神典膳辻太郎外
と〻〻合入乱まてたゝふ御子神八幡ぐひあ左早ぐまく
鎗をかざ〻堤の中ふひ〻りと飛入朝倉藤十郎中山助六戸
田半平鎮田市左衛門太田甚四郎敵藤久左衛門きてひかり
て鎗を合て依田朱塗の物具ふく戦ひるゞ深手負て倒ま
〻を御子神辻依田を一刀づ切〻り〻と山本も鎗をお折て
痛手負ぐ〻依田ゞ屍を肩ふ〻ケく引退く敵手追つもれバ
城兵又切〻かゝるを中山鎗を合せ太田弓ゆ〻さ〻詰引つめ
射〻り〻ばバ門ふ追込〻り
太田後善大夫といふ時士一人太刀ゞ許よ来て吾ハ真田
家の浪人ゆて上田の軍ゆ時相手よ求〻る者ゆり其時射

らまゝ失を携へ来まうと云へバ太田かゝる事ハ必ヒ紀
ヨ聞人の出らるなる有て證ふさべしとてよび入ぜて近き
あらうふ笹瀬左大夫とゝく武功の有し人をよびよせて彼
真田ゞ士ヨ對面さて其人やゝる八上田ゆく出合さうと善大
夫あやゝゝく一番ふ出さる八髭の多くいのゝ大男なり
きといへバかの士よく見届らまつそさ八真田荒右ゑつと
ヤ者なりと答ふ其次の男ハふとうゝる男とふそれを
何の左仲とヤ者なりさて其次なりといやくそれハ
ちゝくの男なりたといへバそさ八無極とヤ者なりさて
分明ふ見定めれしといふさて其次ゝれたりとといへバ太田
いうふもちうなりきとといへバ其時この矢ゆく射られきて

矢を取出てかの者ハ細野拵えゆとふ者なり其後善大
夫申て細野を尾張の組付ふさうしうや
さゝてゞも鉄炮をうちふ事霰の飛ゞごゝく寄手の先陣地
よひゝゝく跪くゝり本多正信下知して城をバ責ゞ昌幸と信仍
ハ中のゝふ出るを牧野右馬允康成同新次郎忠成させ向ふ其
間二町計もあゝんよ真田父子八十四人をつゞみを打ゝく高砂の
謡をうゝふ榊原ゆゝたやうれとい事ゝふ真先よ馬を乗ふ出
さて其兵二千計後を取切んとすさバ渡辺半藏も鉄炮をうち
うけく進うゝば松澤五右ゑつ敵の付入心許なくんとく城ふ
入ぜやと旋めく真田高砂の謡を終らぐゝく引入ゝり康
政康成れゝぶいく考ゝるを正信かゝぐゝう攻ん事始るべ

〻〻ばと制し〻まバ引返せ戸田辻名の七人を上田の七本鎗
と世ふやなり戸田ハ銀の觸髏のち〻物辻ハ白地四半ゑ辻と
いふ字を墨ゆく書〻り信仍箭文を射させ二人の武勇を称
〻り此中山ハきため〻る取法の上手なりとゝや
後ゑ依田を太刀付〻一二の論ゆり辻ハ依田朱塗の頬當せ
〻といふ御子神ハ依田朱塗の曽呂て頬當ハなゝとゝふ牧
野右馬允徒者を馬ユ郎ゆ〻く上田ゑ遣〻一様そゆて山
本ゑあひ其時の事を問ふ山本ゞ云此論有べき事なり雑
人ゆもせゑ頬當をかけぞとゝふ人初太刀なり依田ハ頬當
かけざりたせハ〻ゞ場の鎗下なれバ血ゑ染〻るを朱ぬり
の頬當とゝ〻るあるべ〻と云〻を聞て ゆり牧野ゑ倍を

〻〻ば御子神一の太刀ゑきハまりゝり
かく〻力攻ゑせ〻まバ人死傷せん早く美濃ゑ赴くせゆゑ邑
と評定有森右近大夫忠政を上田のおさへと〻 台徳院殿かと
みをとゝせゝふ榊原殿せ〻ふ真田遥ゆ九〻く榊原ゞ有根吾を侮
きゝり追ゝけ〻く〻ひ〻あ一軍をんと云〻〻ゝ真田ゞ許ゑ年老〻る
法師武者の謀ゆ〻〻き有〻るゞ康政ゆどの者いゝで其謀なる
歟き古れ兵法ゑ帰師勿逐とゝゆゆれ〻と〻〻ぞめ〻く追ざり
〻〻と 東照宮榊原ハ必かゝり引〻はさべきものゝと仰せらま〻ゞ後ゆ
召〻く御尋ゆり榊原承り御大将ハ城ゑ遠き山ゑかゝり〻引ゆ〻と
申〻く臣ハ城下を真直ゑ殿仕〻りとヤせ〻らバ 東照宮汝必
右〻〻んと〻ひ〻ふ果〻〻〻ハざり〻〻りとぞ仰せらまゝる石

田ゞ軍やぶれてゝバ真田父子を誅せらるゝ処ゟ信之此度父と引分
まゝく家ゝを捨て父を助ん為ゟ大國を賜ひしも何ゟ仕
らんあはれ信州を以て二人の命ゟかへ度旨をヤされゝを
信之井伊直政榊原康政こゝ数ゝ父を助ケまゐらせんと
東照宮ゟ召許容あり〳〵と仰らるれバ　台徳院殿ゟ
信之父を助んといふハこゝろあるまゝ子ども安房守ゟさん
ぎ〳〵まゝく関ヶ原の軍ゟ於てまゝ〳〵必安房守を誅さゝべ〳〵と
て御ゆるさゝるの色なくバ伊豆守ゟを承り又兩人ゟ就
く仰の趣ヤべき詞なく〳〵かゝ仰んとゝ父を殺〳〵ども用ひ
ざゝるバカゟ及びゝバ只一ツ志ゝ不のん安房守を誅せらるゝ
より先ゟまづかくゝゝ伊豆守ゟ切腹を仰出さゝるゝ御敵

の子なゝるバゝあるべきと世の人も存べ〳〵必父在世の中ゟ伊豆
守を誅せらるゝよと云も終らぬゟ康政心得くゝ房州御赦免の
事ハ康政ゟヤ上く事ゟくせんむ〳〵の義朝ゟハ大ゟ異なれ
豆州ゟゟといふく其旨をヤせらるバ　東照宮　台徳院殿も
聞召入らゝるく真田父子ゆゝるゝるゝといふ
信之ゟ信濃十二万石の地を賜ハり昌幸信仍ハ御赦を蒙り城を
出く紀州高野の禁九度ゟ引籠る信仍常ゟ父と兵法を談し
く天下の時勢を計ゝるゝ昌幸ハ六十七歳ゟく九度ゟ死す
其後大坂ゟ乱起ゝるゝゟ秀頼信仍を招ゝるゝゝ此比世の中
さゝゞ〳〵かりゝるゝバ紀州ハ浅野長晟の領地なるゝバ橋本ゟ
百姓ゟ真田大坂ゟ仍事あるゝゝあよと下知せらるゝば

用心きびしうもてなす信仍橋本山の百姓数百人を九度山に
まねかり家あまた設けて酒宴してありて上戸下戸をいそ
ぎもてなすに前後もたゞ其時百姓の兼来し
馬よりうの物取付百人計ずつ紀伊川を渉り橋本山より
木のめ路よりかゝる大坂まで行きうるる道をまて百姓ハ三ヶ九度山
よゆきぬ残ア女こどもに信仍が鎗眉尖刀の鞘をぬぎ鉄
炮よ火なはをもたせみり押止る者あらバ忽討殺すべき体を見
くせんとなり九度山よ醉伏なる者ども夜明て見まバ真田ハ
なりいなと向ハ昨日もうくの有様よく河内路よ赴たりと
いよ欺まり と悔めども力及ばず信仍大坂よ帰り只一人大野修理
治長が家よ行信仍其比薙髪して傳心月叟といふ大野が士

信仍とハもとゝ何國の修験者ぞと問信仍大峯より来れりとハ
折節修理ハ居合せ此しく番所のかゝよ通入玉ぬ
若き士なれども刀剣の物語をして信仍よ向ひ汝が刀見せう
まてといへば山伏の大杉ぐよりひとく出せを抽く見まバ
心も詞も及ばぬまでさゝバ脇差をぬんとく是をぬるふ是も
同じ事なまバ如何ぞ云ふ脇差ハ貞宗刀も
正宗なり人をあやしみ給ふ其後信仍彼若き士よまて
刀の目きゝハ如何ぞやと尋ハ赤面せしぞ
修理帰てく信仍をもてなく大よ悦びとくも来れりよと禮
儀正しくて書院よまねき入てなゝぬ秀頼速水甲斐守
時之を使ふて黄金二百枚賜ハり軍兵の事ハやがて下知有

度〻ありて既に東西の軍起るに及びて　東照宮いふもて
信仍を降参させばやと叔父隠岐守信尹を以て此旨仰らるる
信州ふく一萬石賜はりしひきんとなり信仍同心せざるべバ又信
州一國賜るべしと仰せられ信仍怒て義ハ人の道なり
秀頼に二心なき事存もよらぬ重ねて使をせられ
存る旨ありと罵て信尹を追ひ
或説に信尹に向て天下に天下を添て賜るとも秀頼に背
きて不義ハ仕まじ汗の出るまで肌をぬぎ小性にぬぐませ
て首を関東北両御所の前に出べきとてうちはひ
みてうせなり○元禎按ずるに昌幸徳川家に服従し奉
て後関ヶ原の乱に及て背られる事二度に及べり此義と

いへども義なるにや
犯の罪を宥めさせられ信仍其寛仁に何を以て報いいや
心得らるべき豊臣家ハ真田数世の君に非ず若君に不背乃
義を論ぜバ武田家亡びて後世をすて山中にかくれてハ
いふに有べき真田が論ずる処の義道に叶へるとハいふべし
ら世の人真田を以て賞称する事甚し故に愚論を述
るに及べり
大坂冬の陣に出丸に有て防ぎたるが大敵の責し時守固り
て和平に及て信仍越前忠直に仕へ原隼人負亂ハ原ハもと武田家の士と酒盃数献の後信仍
よ〻有て招きのてあり鼓をうち子の大内に舞せて奥へ入るが信仍云ふハ吾必

討死せんずのうひ此外よなぐ〳〵て再會する事よされと終ハ
軍ハ及ぶべ〳〵落ぶまてく九度山よかくれ居しぶ一方の大將とな
りてハ豊臣家の恩ぶらくんやうなる物ハ鹿の角ハ
立物の曽ハ真田家よ伝へしる物として父安房守讓り与へてハ
重代ての軍よハ必きんずるあなるまじハ見置て当まハりはへ又命ハ
をしらるゝども大分ぶりひ出もなく空〳〵く戦場の土とあら
んハ不便よんと存ぶるまハ自亂も涙を流し軍よ臨む者誰ら
生く帰らんとなりべきと答へしハ信仍白河原毛なる馬よ六連
銭を金りてもらうしる鞍ハ乗まハ〳〵原よ見せて城
ハ壞しるたるまバ天王寺口ハかけ出く馳めぐり下知して思ふ程
軍せどやと存ぜれバ此馬のかくあるんと語て又酔く別ま

くり果して和平敗まるバ元和元年五月大坂ゆて軍評定あ
て後藤ハ大和口の先陣ハく平野ハ陣〳〵ぬ五月六日ハ夜信仍毛
利豊前守勝永と二人打連く後藤ハ陣ハ仍明なバ國分の山
を踰三万ハ軍兵を一陣ハ〳〵関東の旗本よ一文字よかけ入
軍神も照覧ゆ兩御所の首をとるゝ三人ハ首を実撿ふそる
あるゝ二の中よくく寂期の盃せり後藤ハ六日の夜半ハ出
道明寺口ハく討死〳〵て毛利ハ藤井寺よ陣を進しれたや
後藤ハ軍やぶ〳〵関東の軍兵三十万もいんん洪水の溢ま来
るがや〳〵真田を待ども いまぐ来らぐ真田ハ兄の伊豆守と同
心〳〵く裏切するよと人々罵てるるあよ住吉海道よりハ赤旗
打立馬煙ふゝ立く来るをみまバ金の幟とりハ馬印そたい四

なまこば毛利が陣もいさみあくり信仍誉田の方ふすめばさてハ
いよ〳〵一心よと人々あやしもの処よ信仍堤れ上よりのぐり鉄炮を進
め〳〵伊達政宗の先陣片倉小十郎よ向て射くかゝる信仍真先ふ
進て当てゝひ〳〵が片倉が陣敗ゆを逃るを追て敵あまゝ討取ゝり
片倉金の鐘れ差物ゆく麾をとりゝりゝて政宗の旗本れ駆
馬バ鉄炮もすゝみ来る奥州ハやもる馬多き所なまこバよい馬を
撰びく若き士よ乗ふ馬上よりり鉄炮をつゝべ立させ敵ひゝむ所を
馬の首を揃へく忽乗破りかけみだゝく追崩を軍畧なりまぐ
其間相去る事遠ゝりゝば信仍いざ疲まゝゝふ息をたけ
曽を脱と下知ゝゝまこバゝれ曽をぬいぐ休ゝ居ゝり敵やく近付
ゝゝバ信仍さゝば曽をゝよといふゝどゝゝあれ曽の緒をゝめ

鎗の穂先をゝろへく敵よ向ふ政宗の鉄炮箕なりふ
かゝり来ゝ雨の降ゝく打ゝけゝり信仍真丸よ成くゝてものゝ
まゝ面よ一足も引なゆのゝと下知ひゝくと跪く声ふ信仍
をゝゝのへ力を合せくゝゝへゝゝる信仍大音あゝ一寸も引な爰
ふ死ゝやと下知ゝて鎗を取てかゝまバ士卒一同よ立上りめい
て鎗を打入ゝまバ政宗の軍兵大よ破ま一支もなく崩まゝり
此を世よ真田が天王寺口ゝ軍ゝて大軍の騎馬鉄炮ふ打続る
有様をゝゝく称ゝゝり信仍士卒を立固めゝづゝゝ毛利が
陣よ来る大久今年十六紫組討ゝて取ゝる首を鞍の四方手ふ
付手負ゝゝるゝ流ゝく血をもぬぐゝゝゝ馳来るを毛利見てあハれ
父の子なりゝと感ゝゝり信仍毛利ゝゝをゝゝゝ涙を落ゝ時刻遅く

後藤が討死せ〜友謀空し〜く成ぬるも豊臣家の運尽ぬる所
なりといへバ毛利々よ太敵よ打勝まゝ武勇ハ有様古の名将ハ
もまさりしとぞ云々るかゝるよ秀頼の黄母衣ハ使番乗来
ゆゑく城中ハ引こりりんと下知せ〜まゝ〜ハ信仍ハ赤旗ハ
〜立今一軍せんと曹の緒をしめ直し勇氣殊よいあしく
見えゝりゝと水野日向守勝成ハ先ん〜いざ軍せんとて改宗
ハすゝめらゝ〜ハ同心のゝてなゝ越後少将忠輝〜ハ陣を進
められ〜ハ此も真田ハ陣よかゝらんと曹をゝんのゝ政宗の士大将
片倉小十郎忠輝の前よ来り日暮よ近く軍危〜〜んとゝ〜ハ
ゆゝの士どもいざかゝり〜く討とゝん弱敵をあまたまゝとゝいつよ
片倉それハひゝ事ゝゝん日本國を敵ゝ〜く軍とる大坂の老を

を弱敵〜いふなきや片倉ハ組の士三十人ハ中二十九人ハ討死
〜〜り是ゝれよとてつばまで血よ染る刀のまゝ〜〜を
見せてゝり越後の士大将花井主水もいゝまゝ〜軍奉行王
虫對馬よ問ふ玉虫敵ハ二の所ハ勝を心ゝけんかゝり〜く軍ハ利
ハまゝ〜といひく〜あ〜ひゝくわ
忠輝大坂をつゝべきやと評定決せゝ篠瀬左大夫足軽を
ゝけゝひ〜ゝひ〜くゝひ〜もべ〜軍をさせ〜まゝよとゝむ
玉虫僅ある足軽を以くいゝゝ〜く敵の大軍をくひ〜ひべき
といへバ篠瀬ふまゝのゝ事ハゝゝ〜六尺の大男を足のう
らふ踏ぬきすれバ行歩ひまゝるゝのゝ人数少〜〜〜く
つけらまぬ事やあるとふ玉虫地の利ゝ〜ぬ所ゝて日もくま

ようやきぐりの合戦ハ危きあるうと押とゞむ小聖能登守ハ判官殿三草山をうゝえての合戦ハちゝぬ國の夜軍なゝぞやといふ皆川老甫小聖能生る花井主水條瀬死大夫ハ駈らんといへども王虫對馬林平之丞ハ打ゝ留く論決せざりしゆふ大坂方ちゞゝゝ引取ゝゝもいへり

真田ゞ陣ハ八ゝに扇をあげゝく招き何て軍しのハぬぞ少あゝふ呼ハりゝと牧かゝらざりしバ信仍ちゞゝと兵をもき め関東武者百萬もあれをのこハ一人もなゝと大音ハ罵りゝく引取ゝゝまバ 東照宮王虫ハ林道春ハ呉子ゞ六國の風を説さる章を讀しめらまゝ王虫を逐出さまゝゝり此王虫ハ甲斐の武田家ふく物しゝあゝる軍奉行ゝゝふいゝるゝ故なゝんもれゝきあゝる七日の軍ハ信仍兵を出せしゞ秀頼の出馬をすくめんゝゝん子の大夜を城ハかへしゝゝと大夜今年十六ハ及ぶまゝく片時もかゝゝを離まゝんハぶ者ゞ今討死のきハハ逃ゝりと人のいゝんも口惜ゝゝん去年母上ハ奉ゝりゝ後文の出ゝよりふなゝらんゝく相見んハ福ゞハしゝゝまでゝも合戦の場ふく必父うへと同枕ハ討死せハ若ふも名ゝゝを残ゝれと誡めらまゝしゝといひゝまバ信仍城中へ帰まゝいふと秀頼公の涙ゝのなり父子ともゝのゞるべきや面ゞて冥途ハ急べきをちゞゝの別まを惜むゝて口惜ゝまゝゝく城ハまゐまゝて取つまゝる手を引放せバ大夜名残をゝけふ父をんゝくさゝゝバ冥途ゆゝゝて引ゝ信仍大夜をんおゝゝく落る涙をちまん昨日誉田ふく痛を負しゞ

よりて体のなんとなるハよりも最後よ人ハ笑ハまで心安しといひ
ゝるとうやかくく大坂の軍敗まゝらバ信仍討死しゝるを首をば
越前忠直の士西尾仁左衛つ取ゝ小雑ともちゝ真田信尹
馬よ乗て打通り此を見ゝく其曹ハ見知ゝるぞ真田左衛門佐ゝ
ゝ口をひゝいくゝよ向歯二枚剛ゝく有べきといひゝ小信尹ゝ
詞のごゝくさてゝて左衛佐とハちゝくゝれ彼曹ハ原小物語て
ゝせゝるなり弓箭とる身ハおのひ出の剛かゝく云おくべき事
ふゝてゝいひあゝう大分ハ城中よ入秀頼小従ひゝく黄田曲輪の
矢倉小こゝりゝく父の事を移ゝゝる小討死せゝゝ剛てゝれ
より物もいゝゝ母ハかゝゝふ賜ハりゝる水晶の珠数ゝ首小か
け秀頼の自害を待居ゝゝば速水甲斐守大分小向ひて組討の

武勇さくまゝ紀ふゝまひゝゝく痛手負ゝゝゝ中為和平ゝて
君も城を出さゝのゝゝ真田河内守信吉の方へ人をそゝく
送ゝゝゝいゝども動ゝゝ寄手矢倉を取巻ゝゝ時
速水戸口小立出ゝく大分ゝ有相ゝかゝゝ武勇の血脈ゝて
ゝゝ紀老なりゝと云ゝゝゝゝ終小大分ゝと矢倉の中小死
て父子同じゝく豊臣家の為小亡びゝゝ
○大坂夏陣よ真田信仍と伊達家と軍ゝる時伊達家の騎馬
鉄炮をうち立ゝれバ王の飛ゝゝ叢の降ゝゝ信仍ゝ軍
兵ども折ゝゝく鎗を敵の方へさゝ向ゝゝ居ゝゝ小西村
孫之進ゝゝ者ゝゝゝゝる味方ゝ屍二ゝを重ゝく盾ゝて
居ゝゝ小王一ゝ来ゝく二ゝの屍をうち通ゝ孫之進ゝ肩小傷ゝ

きまてぐもうにゐたなり鎗を握アるる左のこぶしの大指こそぐもくて氣味悪く覚え居る指四本ゆく大指をゆぎり込くくくくきり入全身の危きるハとまもまく大指の先乃斯れくくれハ怯くる故あくんとひく左右をかくふ皆ちくり又かくくよ並び折ちきくくよ考るよの中る音甚強く動きくく我身よ中アくくるくと行ゐくと後よ人よかくりくくぐ此時孫之進伊達家の秋郷甚平という者を討取くまでぐも其姓名をもくむで落城れ後孫之進いまぐいづまの家ゆも仕へて江戸よ行ゆきみくくしぐ相知る老の方へゆくくくゆ者もくく時客来まり主人西村ゲ事をかくりく大坂ゆく事ゆ

くくくゆくくくいかの客ハ伊達家の士海道林左衛門と

くくく者なるぐ誰の陣ようちくくくと問ふ西村真田左衛門佐

が許よ有くくと答ふ客の云さて八五月六日の戦ゆてれ事なる

べくく具よ某アれもちくゆくと聞ふ西村ゆくくさをる事ゆてもいく

ゆくも尋ゆふ付くくゆべくく伊達家と始の一戦終り後れ軍

殊の外もげくく伊達家の陣を七八町計も有らん追くくくる

事ゆふ三十人計うるくかくくく折ゆくまくくり某くも三人鎗を入

れひき某ぐ鎗の相手れ間よゆくくく構アくくかけくくん人を初鎗

よくくくみの外まを突損じ二れ鎗よ草摺の間を突くくぐ傷

くく者をこくんくせくに歴その人ゆくやいひくん従者と覚く

き者二三十人も取巻くくくくふくく幾刃くくもゆくきくくく

皆具足の上ゆくくくを負ぐんひくぐ鎗ゆく脇骨をはくれ

倒まさく絶入それよりハおぼろゝ後まで兼ねへハ真田ゞ惣軍どつと押かゝりれとまさつゝゞ首をとらまつゝれ中彼突伏
ゝる鎗の相手ハ定めくなすけのうまさつゝあるべゝと存ゝ
其後少ゝ人心地つきるゝ馬とう弥右衛門ゝ者ゝ
手ゆく弱るといふ事やあると西く跡の方へ帰る音かすゝに
耳ゝ入ぬ見捨く逃きるゝとそひゝふ又来く腰のゝぬぐひ
を水ゝひゝゝ持来ゝ口ふきぬぐゝ入ゝゝゝゆゝ弥氣付ゝゝを
孫右衛門かけく城中ゝ帰ゝ翌日も其疵故働く事あゝゝ
戦場ゝ出ゝゝゝく思ハぶるふ存命ゝいへバ彼客聞く驚き
初の鎗を合せんハ士大将秋部刑部ゝゝ者あり其間ふかけ
入ゝゝハ刑部ゞ子甚平といふ者あり御物ゞゝ出て疑も

かゝゝゝ甚平をゝ陣屋ゝ連帰ゝゝゝゝゝゝゝ死ゝぬ察せゝれ
ゝ通一陣の大将ゆゝゝ其日武功の證人ゝハ我ゝ立べきふてゝ
其ゝゝゝをまゝゝせんとゝく右れ次第を書花押を加へく
西村ゝあゝゝて誉田以来の家令珍らゝき縁なゝゝて互
ゝ扶ゞゝゝて別ゝゝゝ西村後ゝ池田の御家芳烈公光政
朝臣ゝ仕へゝゝり
○佃次郎兵衛十成ハ加藤嘉明の左れ先手の士大将なりから
ゝゝの船軍ゝ十成敵船ゝ乗移る時敵剣ゆく口中へ突入
さゝまでゝも少ゝもひるまゞ打飛込ゝゝを棒ゆく曽の上を強
く打ゝ海中へ落入ゝゝまでゝも水ゝ長ゝゝれバ泳ぎあゞるを
従者熊谷覚兵衛薙刀をさゝゝ出ゝゝ取付直ゝ敵船ゝ乗入

て船中の者どもを撫切にし〳〵り以て嘉明船あまた乗取れ
〳〵其一つなり関ヶ原の時嘉明ハ伊豫の松前を出く関東に
打向ハまつ〳〵よ十成ハ堅固に守まして下知〳〵く松前に留守居
〳〵り毛利輝元の兵村上掃部能鴻内匠曽根兵庫宍戸善
右衛門松前をとらんと支度〳〵て能鴻村上ハ河野の一族
なり〳〵招ざ〳〵よ人々従ひなん豫州を攻とらん事掌の中
よ有と評議〳〵豫州の人平岡善兵衛といへる者を郷導と
三千餘をひきゐ〳〵く豫州に打向ひ使を以くらく城を明渡さ
まよ遅くハ踏潰さんと松前へ云やりそり城代加藤内記但
と相謀て先敵を半ばとるべ〳〵く子細あく城をとのけ渡ハ
ば〳〵ばまでも妻子をかくつる間を待まらへと返答ハ左

も有なんと侮て〳〵く三津浦に上り民家に陣〳〵く待居〳〵り大
洲の城に藤堂高虎有て加勢をさ〳〵向らまつ〳〵ハ松前城中の
人々よ後ろびいて十成獨同心せば今敵大軍にく押寄さ
ばといへども謀を設け一戦して義をもつ〳〵ハ弓箭を者の法と
城を枕にして討死とべ〳〵勝利を得ハ生前の面目なり半と
へ勝〳〵りとも人の救よりく運をひ〳〵ひ〳〵りいそまん
事口惜〳〵べ〳〵〳〵く禮義を正く〳〵辞〳〵りそ此時國
中一揆起て三津浦に酒肴をおくふよりを十成ゆゆ〳〵双方れ
勝負を窺て見合せ居〳〵る黒田大溝永田村の百姓小ざ臣紀
者四五人嘆き妻子を質に取り金銀をあく〳〵よく云ふめ
酒肴をもつ〳〵て三津浦へ半ば〳〵嘉明近年松前を領〳〵仕置

宜しくば百姓ども困めり河野一族の人々國ゟ入ゟ事
百姓の安堵なりと悦祝ひ申なり城中ゟゆるりの者ども
見ゟ兼りは嘉明関東へ出陣軍兵を拂て連らまゝゆゑ
今残ると雖ども者ども多く大ゝ老衰病者ゟ一人も
軍もゝき者なゝ佃十成も大病ゟり鉛茶も乏く落支度の
外更ゟなゝ逃去なんと口ゟ云せゝまゝバ安藝の士
大将さも有べゝとて弥もゝゝ彼百姓一人立帰く其
有様を告知せられバ今夜風雨の紛まゝ一夜討もゝ
ゝく嘉明の貯へ有れゝ白布を胴肩衣ゟ裁縫て配り
いゝ十成ハ背ゟ松の字を墨ゟくまゝ合詞
を定め首ハ取べゝ貝の音を聞バ勝負を止く引とれと
約束を定め慶長五年五月十八日成の刻ゟ打立々り忍の者
帰ると今夜ハ村上ゟ陣所ゟ集ると酒盛の半なり磐山の
濱ゟ張番の足軽松前れゝゟ置ゝと告る十成打
破ると通らんハ安ゝまゝども途中ゟ滞ると三津浦へ
なば謀いゝづゝゟ成べゝく道を替江戸山を越く子の刻
計ゟ三津浦ゟ行ゝ寄せ所その民家ゟ火をかけく切て入し
うば大ゟさわぎく物音も聞ゝゝ十成薙刀を提真先ゟ
進ゝゝゟ掃部敵寄ゝりゝく何程の事ゝゝべきとく
かゝ物ゝを夜討の大将佃次郎兵衛なりと名乗て掃部を
つき伏せ敵あまゝ切ゝ見を吹立く軍兵をまゝひき
づゝと引えゝり掃部を始め内匠兵衛も討ゝまゝバ

引退て久米の郷如来寺ふ楯こもる翌十九日十成又もゝ寄
ゝこバ如来寺ゆゝ支へうゝ道後山より引退く十成も深手数
多負く日ハ暮ぬ松前より引とりぬ道後山の安藝の人々近
郷の百姓を相従へ刈田焼ぎゝゝ松前ハ城を攻んと
すゝといやゝゝこバ九月廿三日加藤内記道後村へ押寄せて
相戦ふ十成ハ久米の戦ふ負く出ざりゝゝで重ねて安
藝の加勢来らバ始終いくでゝ勝べき今急ふ追拂ハでは
後日ハ事覚束なゝ手疵を痛ゝて城中ふ死人より敵ふ
向ひ快く討死せんとく城下の町人近郷の百姓二百人計
あつゝ具足を着せ妻子を質よとりく帝旗を指せ十成
引具ゝく道後村より向へバ味方ふ力を得宍戸平正
ふ従ひゝゝ一揆ちりぐふなりこゝこバ終ふ風早の浦より
船ふ乗藝州ふ引退ゝゝ関ヶ原の後嘉明松前ふ帰りく
戦功を撰ゝに夜討ふ首とゝざりゝバ十成村上ハ討取
ゝゝハ明うあゝてゞく其功をいゝゞ生捕の者ふ者づぬふ村
上ゞ陣へ先ゞちく切込ゞる人の白ハ肩衣ハ背ふ松の字を大
きゝまゝゝゝゞ薙刀ふく村上を突伏ゝを間近くゝとりと
いひゝゝこバ嘉明十成ゞ功ふよりく松前をとゝゝゞ殊ふ安
藝の物主三人を討る大洲の加勢を辞せゝ事勇といひ忠
といひゝゝゞゝりとて太閤より賜ひゝる物具ふ感状を
添く浮穴郡久万山の庄六千石を與へらゝゝゝ長十八
年嘉明温泉郡勝山ふ城を築き松山と名付松山の北ふ別

永一郎をかまへ五ツ矢倉をあげ十成を置まぬ元和元年
大坂の軍ゐと十成嘉明の嫡男式部少輔明成ゑ従ひて淀
川を渡り城兵を討取るゑ同年十成関東ゑ召まし葵の御紋
ゑ此時服を下されぬ寛永四年嘉明奥州會津ゑ移りて十成
ゑ二万石をたまへらまたり寛永十一年十成病おもく子孫
どもを集め吾若うより戦場ゑ出る事度々おて疵
を蒙る事十三ケ所就中豫州久米の合戦ゑ鉄炮頭の右ゑ
あたりたる其鉛皮の中ゑあり迄まても運盡ずれば死
せざるべかく老年ゑ及んで病の為ゑ死せんと覚ゆるあり
是を以て思ふに弓箭取ハ少しもさまたげなびきてる志
なるべるべかるべき是を残さんとて刺刀をとりて皮を
破り鉛丸をとり出して前ゑ至三月二日八十二歳ゑて端座
して終まりぬ

○関ケ原の乱治部大久保治右衛門忠佐ゑ二万石賜ひて
三枚橋城主たりゑ渡邊忠右衛つ御近習の人ゑ向ひ治
右衛門を武功の者と思召るゑ此忠右衛つゑ者ハ逃
申るを聞召治右衛つを召まし先年三河ゑて一向宗一揆乃
時忠右衛つ兄弟弓を持其他あまた鉄炮を持る者七人ゑ
汝一人立向ひて相手ゲの勝負なるべ多なるの程を知て
べきゑ多勢の飛道具ゑ吾一人かたりて犬死さべきゑあら
と大音ゑ刻をたりて退きるる聞ゑ迄渡邊めが
でたく無理をいふ男ゑハとりのハ出すて至ゑ去ば必此後

十七ノ五終

内閣文庫

常山紀談巻之十七終

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan